

ショパンとリスト ～互いを讃えた二人の天才～

Yves Henry

1810年生まれのフレデリック・ショパンと1811年生まれのフランツ・リストは19世紀前半におけるピアノ音楽の2大天才です。

両者は音楽史全般、とりわけピアノ音楽史に大きな足跡を残しました。

フランスが二人を引き合わせたのは1831年、ロシア軍がワルシャワ蜂起を鎮圧したためポーランドには帰らないと決めたショパンがウィーン滞在を経てフランス・パリに到着した時でした。ショパンはパリに知り合いがおらず当初の数ヶ月間苦労していたところ、既に長年パリに住んでいたリストはショパンがパリで芸術家として溶け込めるよう直ぐに手を差し伸べたのでした。

リストはショパンを比類なきピアニストとして、そしてそれ以上に彼の作品に見出される特別な才能、驚異的に洗練された和声、かつてない色彩のパレット、尽きることのない豊かな表現力とインスピレーションを称賛していました。

二人の親交の当初、リストは正にパリ中で熱狂を集めたヴィルトゥオーゾピアニストとして比類なき存在でした。タールベルクをはじめ他のヴィルトゥオーゾたちがリストとその地位を争ったものの、リストはパリのサロンやコンサート会場に相次いで登場した『ヴィルトゥオーゾ』と言われるピアニストたちを圧倒していました。

ベルジョイオーゾ侯妃が開催したリストとタールベルクのピアノ対決についてマリー・ダグーが述べた次の言葉が語り継がれています。『タールベルクは世界一のピアニストであるが、リストは唯一無二である』

一方ショパンは彼の練習曲op. 10とop. 25を演奏できる唯一のピアニストとしてリストの才能を称賛しました。実際ショパンは練習曲集op. 10をリストに献呈しています。しかしショパンはポーランド人の控えめさとは対極にあるリストのエキセントリックな人柄の全てを好んだわけではありませんでした。特にリストがショパンの作品を弾く際に書かれていない音を加えることがポーランド人であるショパンを大変に不快にさせ、彼は次の様に言い放ちました。「こんな風に私の作品を演奏するなら弾かないほうがましだ！」

パリのサロンが奪い合うこの二人のピアニストの性格の相違を考えると、彼らの間にライバル関係があったとは考えられません。彼らは違いすぎたし、共に天才であったし、競い合う理由が何もありませんでした。それどころか二人のピアノ音楽の表現についての高い芸術的要求はむしろお互いを近づけたのです。

二人のピアノ音楽の書法への歴史的貢献は明らかであり、また互いに補い合っています。リストの功績は初めてピアノにオーケストラ的な響きをもたらしたこと、声楽やオーケストラの様々な作品をピアノ用に編曲したこと。一方ショパンの功績はさらなる響きの洗練性を得るために共鳴の効果を発展させたことで、これが色彩感のみならず、巧みに練り込まれた伴奏の上で旋律を豊かに鳴らし、歌わせることに繋がっています。

時と共に友人関係はやや希薄になり、ショパンはリストから徐々に距離を置いていったものの公式に決別をすることはありませんでした。

だからこそ1849年10月16日から17日にかけての夜にショパンが亡くなったことを知ったリストはその時に創作中だった『葬送』の中間部にショパンのポロネーズop. 53『英雄』の左手のオクターブを明確に連想させるパッセージを取り入れたのです。これが友人であったショパンへのさりげなくも心からのオマージュであったことは明白です。リストは他にも様々な形でショパンに敬意を表しました。まずマリー・ダグーとショパンの伝記を書いたことが特筆されます！この伝記はショパンの死後間もなくに4手の連弾のごとくに執筆され、1851年に出版されました。

さらに数年後の1857年から1860年にかけてリストはショパンの6つの歌曲を編曲しています。これらは原曲に忠実な〈トランスクリプション〉というより変更を加えた〈編曲〉となっている点ではショパンの意向に反しているものの、ピアニストが歌曲という枠を超えてこの音楽を生き長らえさせる可能性を与えました。

F. ショパン：ピアノ・ソナタ 第3番 ロ短調 Op. 58

今夜のプログラムのはじめに1844年の夏にノアンで作曲されたショパンの偉大なソナタロ短調op. 58を演奏します。このソナタは10年後に作曲されたリストの同じくロ短調のソナタと対照的と言えます。リストはソナタ形式を打ち破ったのに対し、ショパンはソナタ形式の従来のあらゆる規則を尊重することに拘りました。ショパンは確立した秩序を尊重しリストはその秩序を破る——この対象的な姿勢こそがリストと対極にあるショパンならではの特質を示しているのです。しかしソナタ形式の規則に従いながらもショパンは彼唯一の個性、独自のピアノ書法、ベルカントの芸術、ポーランド人としての魂を注ぎ込み、それらが多角な面で傑作であるこのソナタを生み出し、各楽章それぞれがある種の極みに達しています。

第1楽章 構成力と表現の自由さの調和が生み出す金字塔

第2楽章 きらめき駆け巡るリボンの広がり、そしてショパンにしか生み出せない
優雅さと装飾性の極致

第3楽章 表現の深みとベルカントの美の調和

第4楽章 目が眩むほどの流れで終わりまで緩むことのない、生命力に満ち溢れた圧倒的な疾走

F. ショパン＝F. リスト：6つのポーランドの歌 S. 480 R. 145

(乙女の願い、春、指環、バッカナール、私のいとしい人、家路)

記念碑とも言える壮大なソナタに続き、リスト編曲によるショパンの6つの歌曲を演奏します。リストはそれぞれの6曲に本質、つまり歌曲の元となった詩に結びついた独自のキャラクターを引き立たせることに成功しています。

- | | |
|--------------------------------------|--|
| 1- 《 Zyczenieジチュニ 》(乙女の願い) | 軽やかさと優美さに溢れた曲 |
| 2- 《 Wiosnaヴィオズナ 》(春) | ポーランド風の旋法の響き、小さな子守唄のよう |
| 3- 《 Pierścień ピエルシエン 》(指環) | 愛の吐露を思わせる |
| 4- 《 Hulanka 》(バッカナール) | 踊りの要素が強くマズルカを想起させる |
| 5- 《 Moja pieszczotka フランカ 》(私の愛しい人) | 洗練された転調が見られる美しい曲 |
| 6- 《 Narzeczonyナジェチョヌ 》(家路) | 風変わりな曲で、ショパン風というよりも、むしろ完全にリスト風な1曲です!!! |

F. リスト：詩的で宗教的な調べ より『葬送』 S. 173/R. 14 A158

今夜の締めくくりに、リストの『詩的で宗教的な調べ』より『葬送』を演奏します。

先の説明の通り、リストがこの曲の創作中に亡くなったショパンへのオマージュが中間部分に含まれています。この非常にインスピレーションに満ちた作品は1848年にハンガリー革命がハプスブルグによって鎮圧されたことへの反発を意図したものと考えられます。

導入部では低音部で鳴り響く力強く規則的な鐘の音に続き、葬送行進曲、そして（ショパンの『英雄』ポロネーズの引用となっている）英雄的な戦いの行進曲へと続きます。曲の結びでは中間部分のオクターヴがわずかに再現されるものの、唐突に途切れて終わります。この描写はリストが作品を通じてオマージュを捧げたいと考えたハンガリーの3人の英雄、フェリックス・フォン・リヒノフスキー侯爵、ラースロー・テレキ伯爵、ハンガリー首相バッチャーニ・ラヨシュ伯爵の命が突然断ち切られたことと思わせます。

翻訳 元吞 千香子

